現代俳句全集　二

現代俳句全集　二

澤木欣一
佐藤鬼房
草間時彦
岸田稚魚
金子兜太
桂信子

立風書房

現代俳句全集 2

1977年10月5日　第1刷発行

¥ 2500

現代俳句全集　二

著者代表＝桂　信子
装幀者＝前川　直
発行者＝下野　博
発行所＝立風書房
東京都品川区東五反田三―六―一八
TEL（〇三）（四四七）一一九一　振替　東京五―七四四九三
印刷所＝信毎書籍印刷株式会社／株式会社美術版画社
製本所＝大口製本印刷株式会社

乱丁本・落丁本はお取替いたします。
Printed in Japan 1977 ©　0392-R8402-8909
無断複製（コピー）を禁ず。

目次

桂　信子集……5
月光抄　女身　晩春　新緑　初夏　自作ノート
●桂　信子さんのこと――生島遼一　48
金子兜太集……55
少年　生長　金子兜太句集　蜿蜿　暗緑地誌　早春展墓
狡童　自作ノート
●持続と変貌（金子兜太について）――岩田　正　103
岸田稚魚集……109
負け犬　筍流し　『筍流し』以後　自作ノート
●受身の詩魂（岸田稚魚小感）――島田修二　157

草間時彦集……165
中年　淡酒　桜山　『桜山』以後　自作ノート
●感想――安西　均　212
佐藤鬼房集……219
名もなき日夜　夜の崖　海溝　地楡　鳥食　自作ノート
●鬼房私見――岡井　隆　264
澤木欣一集……273
雪白　塩田　地聲　赤富士　沖縄吟遊集　二上挽歌　自作ノート
●初原遡及の情熱――上田三四二　325

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

現代俳句全集　二

装幀　前川　直

桂　信子集

■桂（かつら）信子（のぶこ）（一九一四〜　）

大正三年、大阪市に生まれた。本名丹羽文子。昭和八年、大阪府立大手前高女卒業。このころチェホフ、ツルゲネーフを愛読。十四年、桂七十七郎と結婚するも二年後に死別。のち、神戸経済大学予科図書課、近畿車輛株式会社に勤務。

俳句は、日野草城の「ミヤコホテル」の新鮮さに驚き、昭和十年ころ実作をはじめ、十三年から「旗艦」に投句、草城門に入る。「旗艦」同人、のち「琥珀」と改題ひきつづき同人。戦後、同人誌「まるめろ」創刊に参加、同誌に『激浪』ノート」を連載。「太陽系」「火山系」「アカシヤ」同人を経て、二十四年、草城主宰誌「青玄」創刊と同時に参加。同誌同人。四十五年、「草苑」を創刊、主宰し、「青玄」同人を辞す。第一句集『月光抄』（昭24）では、新妻時代のことや、その後の夫との死別、戦災等で一切を失った悲劇のなかでの生命のいとおしさを、みずみずしい感覚と独自のやわらかさで詠んだ。のち、女身を強調するような句に移ったが、近年は生をより自由な境地から詠んでいる。「ひとづまにゐんどうやはらかく煮えぬ」「ふところに乳房ある憂さ梅雨ながき」「晩年の月日聳える青簾」などの作品がある。昭和五十二年、第一回現代俳句女流賞受賞。

【著書】句集『月光抄』（昭24）『女身』（昭30）『晩春』（昭42）『新緑』（昭49）『初夏』（昭52）散文集『草花集』（昭51）

月光抄（昭和13―23年）

梅林を額明るく過ぎゆけり

短日の畳に厚きあしのうら

ひるのをんな遠火事飽かず眺めけり

ひとづまにゑんどうやはらかく煮えぬ

月あまり清ければ夫をにくみけり

クリスマス妻のかなしみいつしか持ち

夫逝きぬちちはは遠く知り給はず

白菊とわれ月光の底に冴ゆ

墨を磨る心しづかに冬に入る

母のこゑして菊を焚くうすけむり

大寒の河みなぎりて光りけり

たちまちにあられ過ぎゆく風邪ごもり

湯ほてりのひととゆきあふ寒の雨

夕ざくら見上ぐる顔も昏れにけり

ふるさとはよし夕月と鮎の香と

裏町の泥かがやけりクリスマス

元日の鳥が来て鳴く裏の川

庭石の耀る日もなくて風邪ごもり

野に出づるひとりの昼や水温む

花菖蒲夕べの川のにごりけり

庭石に梅雨明けの雷ひびきけり

蟬なくや袖に射し入る夕薄日

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

夏草の根元透きつつ入日かな

蚊を打ちしてのひら白く夏をはる

松の幹みな傾きて九月かな

ともしびのひとつは我が家雁わたる

門をかけて見返る虫の闇

秋風の窓ひとつづつしめゆけり

雁なくや夜ごとつめたき膝がしら

春燈のもと愕然と孤獨なる

葉桜の夕べかならず風さわぐ

牡丹生けてうすき蒲団に臥たりけり

誰がために生くる月日ぞ鉦叩

秋の土鶏のみつむるもの動く

かりがねや手足つめたきままねむる

大木の根元の冷えのひもすがら

冬の松日輪ひとつよるべなし

檻の鶯短日の煤地におちる

ひとごゑのなかのひと日の風邪ごこち

げんげ野を眺めて居れど夫はなし

ゆるやかに着てひとと逢ふ螢の夜

やはらかき身を月光の中に容れ

女身（昭和23—30年）

觸るるものなくて枯枝穹に張り

春の海一燈つよく昏れにけり

桃見ゆる暗き厨にものを煮る

春月の木椅子きしますわがししむら

腰太く腕太く春の水をのむ

藤の昼膝やはらかくひとに逢ふ

瞧より梅雨のはかなさはじまりぬ

ふところに乳房ある憂さ梅雨ながき

きりぎりす腰紐ゆるめ寝ころべば

しづかなる時経て夕焼身に至る

こほろぎのうかべる水を地に流す

月の中透きとほる身をもたずして

中天に雁生きものの声を出す

中空にとどまる凧も夕陽浴ぶ

湯上りの指やはらかし足袋のなか

おのづからくづるる膝や餅やけば

花吹雪いづれも広き男の胸

衣をぬぎし闇のあなたにあやめ咲く

畳の目粗し雪夜をかへりきて

窓の雪女体にて湯をあふれしむ

いなびかりひとと逢ひきし四肢てらす

月光に踏み入るふくらはぎ太し

猛る鵙この身このまま老いゆくか

子がなくて白きもの干す鵙の下

まんじゆさげ月なき夜も藥ひろぐ

紙屑をたきて音なし寒の土

しづかなる母の起ち居も雪の景

雪空のものうくて貨車うごき出す

新樹ゆきくろき仏ををろがめる

初蟬やかがやきそめし水のいろ

寡婦ふたり歩む吉野の春鴉

ゐんどうむき人妻の悲喜いまはなし

身近かなる男の匂ひ雨季きたる

ひとり臥てちちろと闇をおなじうす

犬がゐて鶏頭の地のやや濡るる

煖炉ぬくし何を云ひだすかも知れぬ

枯野来し水に夜業の手を洗ふ

湯上りの身を載せ雪の夜の秤

つよき火を焚きて炎暑の道なほす

虫しげし四十とならば結城着む

帯留を身よりはづして日短し

臥るときのてのひら白く春逝けり

平らかに畳に居るや春のくれ

初日さす戦後の畳やはらかし

壁うつす鏡に風邪の身を入るる

炉の灰に昼の陽が射すひと待てば

賀状うづたかしかのひとよりは来ず

鍋の中にやはらかきもの寒に入る

他郷にて懐炉しだいにあたたかし

稲雀波うつ山にむかひ飛ぶ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c